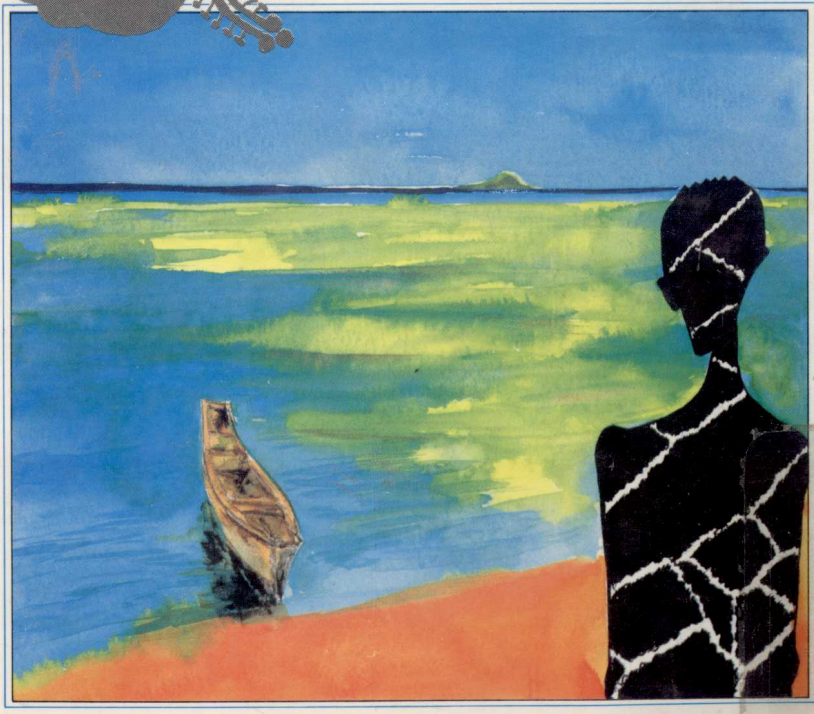
沖縄の被爆者

―癒やされぬ36年の日々―

福地曠昭編著



沖縄県原爆被爆者協議会 刊

沖縄の被爆者

福地曠昭 編著

発刊にあたって

沖縄県原爆被爆者協議会理事長　金　城　文　栄

このたび、沖縄の被爆者たちの生々しい被爆の実相と、沖縄に引揚げてきてからの苦しい生活を明らかにした記録集がはじめて発刊されることになりました。「被爆協」が結成されて十年目に、ようやく総合的な被爆者の証言と、関係資料が一冊の本にまとめられるわけであります。

「被爆協」の結成当初に、断片的に何名かの「被爆者の訴え」を小冊子にしたこともありますが、その後復帰を迎え、高齢化した被爆者の生活がどうなっているか、それを知る資料は皆無でありました。平和を願い、被爆者の援助に当たっている人びと、諸団体の方々に実情を訴え、一日も早い実情調査の必要性を痛感しておりました。

幸い、福地曠昭氏（県原水協理事長）が、昨年来、この調査を手がけられ、短時日の間に各地を直接まわられて、被爆者たちの訴えをそのまま取り上げ、その解決のため貴重なデーターを完成されました。

福地氏は、三年前に当「被爆協」の前理事長金城秀一氏と、厚生省援護課や国会筋に、沖縄の被爆者の見舞金の支給を要請した方です。また私とも、この二年来、被爆者援護法制定のために上京して中央行動に参加したり、広島・長崎の平和大会で沖縄の被爆者問題を訴えつづけてきました。さらに

復帰前には、沖縄違憲訴訟を提訴した際、丸茂つるさんらの違憲訴訟に直接、訴状作成や裁判の運びに尽力くださいました。

このように福地氏は、これまで私たち被爆者の援護のためにご活躍をつづけてこられ、最もよく問題をつかんでこられました。その福地氏によって本書がまとめられたことは、私たちにとってまことに喜ばしいことであります。

私たちは過去において、確かに本土の被爆者たちとは違った運命に会わされました。米軍統治下であったために、加害者側であった米軍は、被爆者のことが表面化すると米国の恥部をさらすことになり、それを恐れていました。

しかし、県民の強力な運動によって、占領中に、本土法の準用という形で「原爆医療法」の適用をかちとり、特別措置法も立法させ、沖縄への準用を実現させてきました。そして、二年前には、十分とはいえませんでしたが、県民の協力のもとに、見舞金の支給をかちとることもできました。

沖縄の被爆者たちは、引揚げまでの期間が長く、否応なく被爆地に長く住まねばなりませんでしたし、引揚げ後も、施政権分離の中で二〇年間も放置されたままになっていました。このような、まだ癒えることのない被爆者たちの「悲痛」を知っていただき、被爆者援護法の制定に一層のお力をかしてくださることを祈ると同時に、本書を一人でも多くの方々が読まれますようお願い申しあげます。

一九八一年五月十五日　復帰一〇年目を迎えて

序にかえて

沖縄の被爆者と「死の灰」の恐怖

広島と長崎に原子爆弾が投下されてすでに三六年の歳月が流れようとしています。広島・長崎では、原爆の爆発の瞬間に放出された放射線、つまり「死の灰」によって約三〇万人が殺されました。三〇万といわれていますが、未だ、その実数は正確につかめてはいません。しかも、原爆被爆者の生存者が、約三七万人にも達するだけでなく、最近では、原爆二世の問題も発生し、原爆後遺症がいまだに癒えてないことが私たちを慄然たらしめます。

私たちは、米軍の支配下にあったある時期には被爆者が沖縄にいることをよく知りませんでした。しかし、現在、三五九人の原爆被爆者が沖縄県内に住んでいることが明らかとなっています。当時、十代から二十代のこの人たちは、広島や長崎で軍需工場の職員として働いていました。疎開や造船所の養成工として行った少年少女たちや兵隊として召集された人びとでありました。この人たちも今では五十代以上になっています。そしてその七割近くが病院通いをしており、脊椎の変形症や高血圧症などにかかっているのです。

沖縄に引揚げてきて、原爆病と知らず、難病として放置されたまま、すでに死亡した被爆者も三四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人にのぼっています（一九六八年現在）。また、本人たちが、周囲をはばかり、子どもにも知られたくないことから、原爆手帳の交付を受けようとしない人もかなりいます。

現在では、沖縄からも広島、長崎の原爆病院で治療が受けられるようになってはいます。しかし、いざ治療となると交通費などの出費も多く、被爆者の救済は十分ではありません。市町村民税の減免や、寝たきりの被爆者に対する巡回看護を強化するなど、まだまださしのべる手が多く残されています。また、過去に死亡した人たちへの見舞金や、弔慰金の未支給をはじめ、中国・朝鮮の被爆者の被爆補償なども不問にされたままになっています。

いまや「被爆者援護」は、こういう問題を避けては通れないのであります。

さて、戦後、第五福竜丸の被災をはじめとして、一、二二一回にも及ぶ核実験（昭和五十五年十二月まで）は、マーシャル人やポリネシア人、アボリジニ北方少数民族に被害を与え続けています。

現在は、実験のみでなく、核兵器の工場や原潜寄港、原発や再処理工場でも、放射能被害が出ています。昭和五十四年三月二十八日のスリーマイル・アイランドで起こった事故による周辺住民の放射能被害でも明らかであります。近くでは、敦賀原発で放射能もれによって一〇〇人の作業員が被ばくしたことが発覚されています。

核が人間を破壊に導く危険性は、遠い実験場だけでなく、わが沖縄でも身近なものとなっています。沖縄の米軍基地に、恐ろしい核が持ち込まれていることは、これまでの調査や報道から公然たる事実

であります。核部隊の配置や核訓練、核模擬爆弾の投下、核避難体制などがそれを裏づけていますし、最近では核兵器の部品や、米国の電話帳によって核部隊の存在が明らかにされたことは、ご承知のことと思います。安保条約に基づく「事前協議制」は、電話で通知されて来るだけの話で、「シリぬけ」となっています。基地を自由に使用できる米軍の権限は、復帰したからといってあまり変わっていないのです。

一方、原潜による放射能汚染は、復帰前に那覇軍港で問題となり、さらに昭和五十五年、ホワイトビーチで高い放射能測定値が現実となって現われました。沖縄本島沖でのソ連の原子力潜水艦火災事故も、大きな危険性を示しました。米ポラリス潜水艦によるアテ逃げ事件は、人命無視も甚だしいものでした。加えて、原子力産業界は、人体に最も危険な猛毒物質「プルトニウム」を製造する第二再処理工場を西表島へ進出させようとしております。

このように、沖縄をとりまく状況は、楽観視することのできない、きわめて危険な状況にあります。

ところで、沖縄とかかわりの深いパラオにおいて非核憲法が生まれましたが、これこそ、模範として、沖縄や日本を、世界を「死の灰」の砂漠と化することを絶対に避けるべきであります。

二十万余の犠牲をはらった沖縄戦では、毎日二、〇〇〇人が殺されたことになりますが、私たちは再び同じ運命にまきこまれたくはないのです。

本書は、沖縄に住んでいる被爆者の赤裸々な叫びを集録したものであります。この悲痛な叫びが、

人びとの口から発することのないような平和な世界の出現を願うと同時に、本書が遅れている沖縄の被爆者援護運動の前進の一歩となるよう祈るものであります。

一九八一年五月十五日

編著者　福　地　曠　昭

沖縄の被爆者　目次

発刊にあたって　金城　文栄 ―― 1

序にかえて

沖縄の被爆者と「死の灰」の恐怖 ―― 3

1 証言・沖縄36年目の被爆者 ―― 13

オキナワ三六年目の被爆者たち ―― 14

爆野の丘から 19

生き地獄の日々／焼けた足をひきずって／ボロをまとって／熱風に追われる／奇蹟の生還／原爆が音を奪った／きり刻まれたおばあちゃん／思いだしただけで身ぶるい／助かって苦労／「ウジ」と臭いと／爆心地で死体運搬／帰らない息子／人の手によって作られた砂漠からの証言／炎と屍の中から

差別と偏見の中で 67

他人に見せたくないケロイド／世間の冷たさに情な

い思い／被爆者であることをかくして／母が原爆病ゆえに帰ってこない子どもたち／きたなくされたみじめさ／何のために生きているのか……／知られたくない〝原爆病〟／断わられた輸血／胎内被爆の兄妹／被爆者と結婚してくれた妻

病いと貧困とのたたかい　91

生まれてよかったと思う日が一日でも…／重なる借金／被爆老夫婦のどん底生活／〝原爆のクェヌクシャ〟の三六年／薬草にたよった治療／寄付の衣類がたより／食うためには休めない／癒えることのない病との闘い／子どもたちへの不安

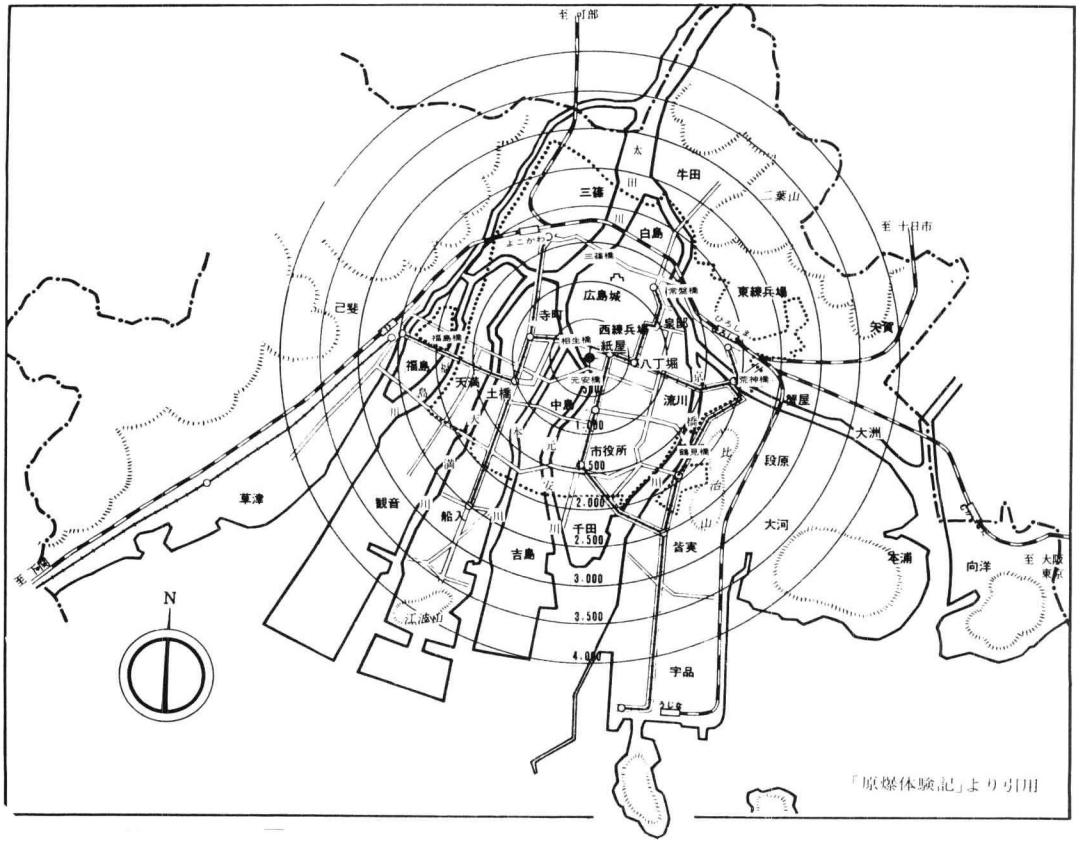
基地があるゆえに　129

被爆者だから首切一番台に／苦しい生活は私だけで十分／被爆者をクビにした米軍／日本政府の考え方はまちがっている／軍事基地があるから軍隊はもうどめんだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

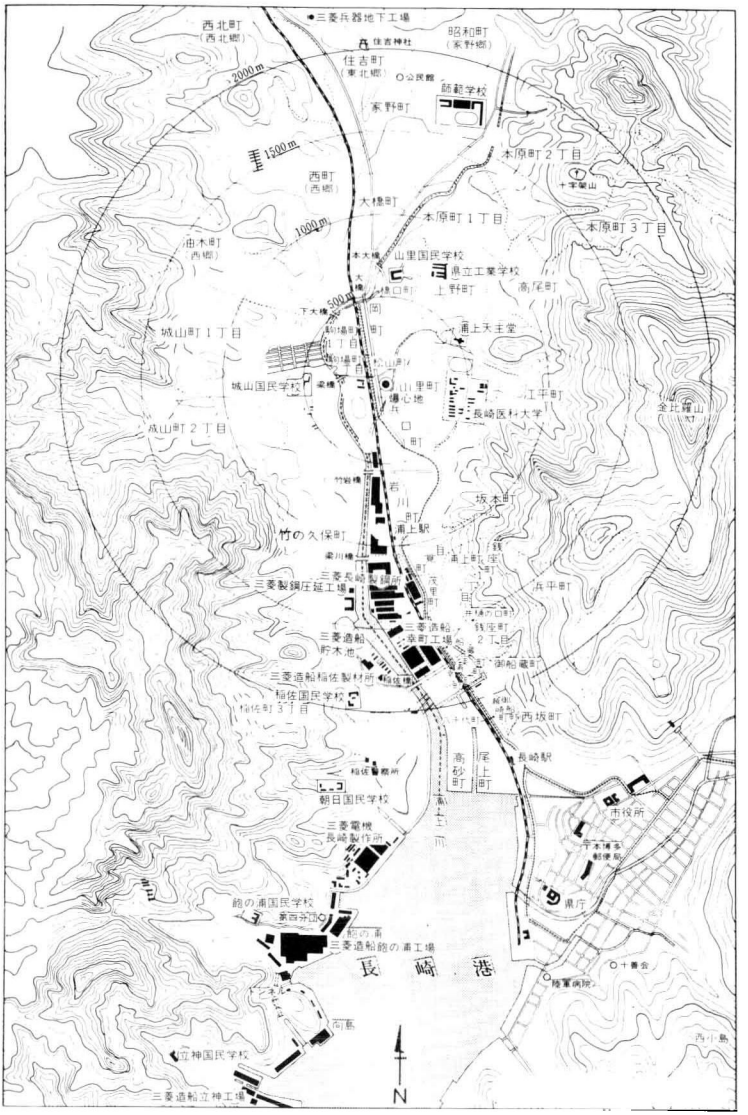
沖縄からの告発 145
原爆よりも平和を／被爆二世の将来に不安／戦争はいやです／人なみに長生きしたい／人間は平等に生きる権利がある／誰のための戦争？／軍事力で平和はつくれない／医療法が適用されなかった矛盾／国を守るとは誰を守るのか／死んでも原爆をうらみつづける／戦争と原爆を告発／沖縄の悲劇を再びくり返すな
2 沖縄の被爆者の実態 179
3 沖縄の被爆者 たたかいの軌跡 187
資料 219
被爆者問題年表 230
あとがき 239

広島市原爆被災地



「原爆体験記」より引用

長崎市原爆被災地

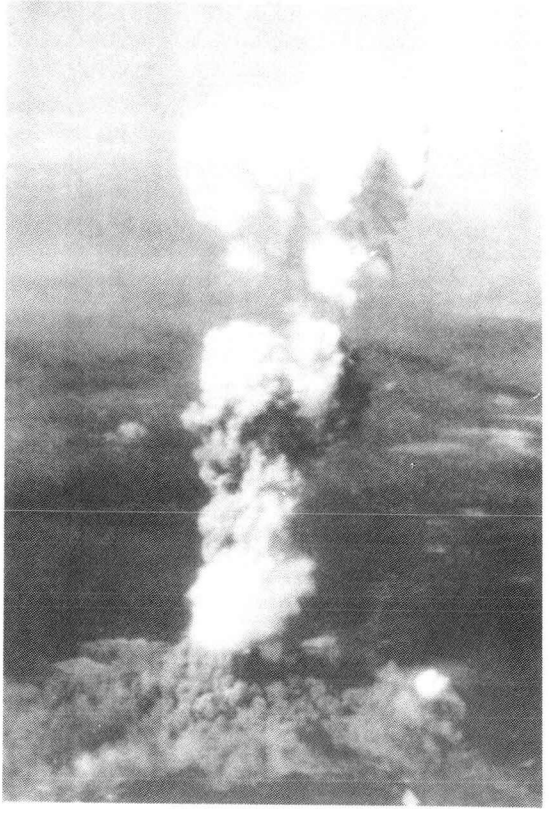


長崎市原爆被災復元調査室作製「長崎市原爆被災地復元地域図」より（主要な施設名は紙面の都合で削除した）

1

証言・沖縄36年目の被爆者

広島上空2万フィート原爆破裂



オキナワ三六年目の被爆者たち

一九四五（昭和二十）年八月六日と九日に、広島と長崎に原子爆弾が投下されました。現在、生存している被爆者は、一九七八（昭和五十三）年三月三十一日現在、三六万八九三二人（被爆手帳交付者）を数えております。そのうち、現在沖縄に在住する被爆者は、三五九人となっています。その三分の二は長崎で、三分の一が広島で被爆したものであります。

これらの男女被爆者たちは、米軍占領下の沖縄へ帰れず広島・長崎に長くいて、残留被爆を受け、その日から負傷や病気、貧困、差別、そして放射能障害の不安とたえずたたかってきました。

この三六年の間に、被爆者たちの中には、病因も不明のまま死んでいった人も数多くいます。生き残ったものは、「死」以上の苦しみをつづけ、将来への底知れぬ不安を抱いたまま生活を送っています。そして今、被爆者たちは、老齢化が進み、平均で六〇才となり、子どもや孫の結婚や健康にまで不安を感じるなど、被爆者の問題はいっそう深刻化してきました。

私は、沖縄に引揚げてきたこれらの被爆者たちが、被爆当時から今日までどのように生きてき

たか、調査しました。

昭和五十四年九月に、まず沖縄県被爆協の総会に参加した被爆者たちに趣旨を説明して、アンケートによる調査を行ないました。この総会に参加できなかった被爆者には郵送で調査を依頼しました。

つづいて本調査として、昭和五十五年一月から三月にかけて、直接面談による聴取を行ないました。中部を皮切りに、那覇、南部、北部と本島をまず終了し、それをまとめた後に、離島の伊江島、宮古、八重山と、被爆者に集まっていただきました。のべ一六〇人の被爆者に対し、予備調査のアンケートに基づいて、より掘り下げて事情聴取を行なったのです。

この調査から、沖縄在住の被爆者は、危険な戦局下で生命を賭して広島・長崎に渡ったことや、引揚げが遅れて長期間両市で働いていたこと。引揚げ後、米軍統治下で全く忘れられ、泣き寝入りさせられていたことなどがわかりました。私は、被爆者たちが、三分の一世紀を越す長い時間が経た今でもなお、身体を破壊され、生命を冒されつづけていることを知り、愕然としました。同時に、それにもかかわらず、生き抜こうとする被爆者のみなさんの逞しさから、生きる尊さを強く教えられました。そしてまた、被爆体験さえ語ることのできない寝たままの老人、子どもの結婚に支障があっては、と固く口を閉ざした人びとも多くいることもわかりました。

沖縄から軍人、軍属、徴用、女子挺身隊、疎開等で、広島・長崎に渡るころは、沖縄海域には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.